

【(5) 発問や指示・説明】

④「児童生徒の思考を深める発問を心掛けている」

《つまずきの背景》

D 文脈を理解することの困難さ、J 言語表現の困難さ、K イメージすることの困難さ

《解説》

子どもの思考を深めるためには、十分に練られた発問を行うことが非常に重要です。練られた発問をするためには、事前に発問計画を立ててから授業に臨むことが必要になってきます。また、発問に対して子どもがすぐに答えるのではなく、書く活動において考えをまとめた後に答えるようにするなどの工夫も有効です。

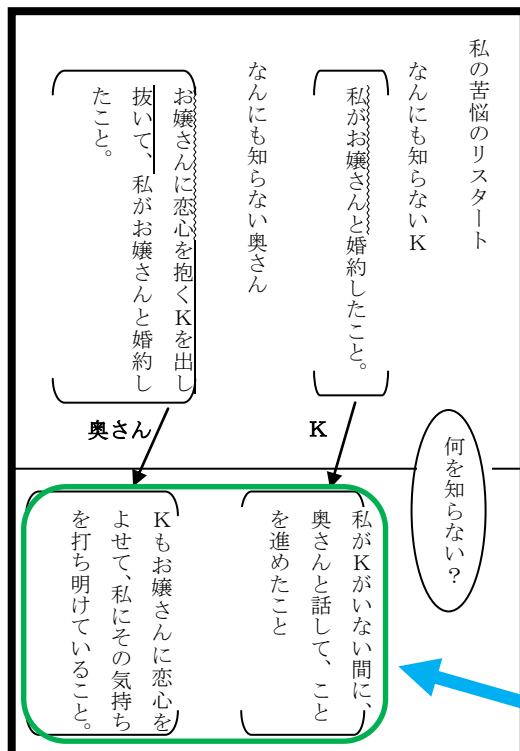
学級の中に、文章を構成することが苦手、言語表現が困難、イメージすることが困難な子どもがいる場合があります。その子どもに対して計画性のない発問を行うと、発問の意図がうまく理解できず、思考を深めることが困難になります。その困難さを軽減するための一つの方法として、発問計画を立てて授業に臨むということが重要です。

教師が子どもが書いたものを相互で見合わせたり、同じ問いに対して複数の子どもに答えさせたりするなどの工夫をすると、支援の必要な子どもは他の多くの子どものいろいろな考えを聞くことができ、それを参考として思考を深めることができます。

【工夫点】

- ・重要な発問は繰り返し発問を行う。(小中高)
- ・中心発問を決めて、それにつながる補助発問を組み立てる。(小中高)
- ・発問の答えをノートに書かせる(ノートの下3分の1を活用)。(小中高 工夫例 42)
- ・明確な発問ができるよう授業の発問計画を作ってから授業に臨む。(小中高 工夫例 43)
- ・同じ問いに複数の子どもに答えさせる。(小中高)

◆工夫例 42 「発問の答えをノートに書かせる」



『こころ』(夏目漱石)の授業より
子どもが書いたノートの一部

《国語(高等学校2年生)》

この事例では、1時間の授業について2、3問程度、ノートの下3分の1を活用して、教師の発問の答えを子どもが考えて書くようにしています。そのことにより、思考の深まりや表現力の向上を図ることができます。また、自分の考えを整理することもできるため、発表がしやすくなるなどのメリットがあります。さらに、書いたものを隣の子どもと見せ合う時間を設定することで、お互いの考えを交換することができ、相手のノートを見て自分の考えをまとめることにもつながることが期待できます。

子どもが書いた発問
に対する答え